蓬莱の玉の枝――「竹取物語」から(1)

『竹取物語』の基礎知識

『竹取物語』は平安時代の初め頃に成立した物語。作者はわかっていないが、当時知られていた伝承をもとにつくられたと考えられている。

現存する日本最古の物語といわれ、『源氏物語』の中では、「物語の出で来はじめの祖」と述べられている。

『竹取物語』は、竹取の翁（さぬきの造）とかぐや姫（なよ竹のかぐや姫）を中心に、次の流れで話が展開する。

・かぐや姫の生い立ち

竹取の翁が竹の中からかぐや姫を見つけ、翁と嫗は姫を育てる。

・五人の貴公子の求婚

石作の皇子、くらもちの皇子、右大臣・阿倍御主人、大納言・大伴御行、中納言・石上麿足の五人の貴公子がかぐや姫に求婚するが、姫は五人に難題を出す。

・帝からの求婚

帝はかぐや姫を宮中に召そうとされるが、かぐや姫は応じない。かぐや姫と帝は歌や手紙を交わす。

・かぐや姫の昇天

かぐや姫は自身が月の都の者であることを明かし、翁や帝が引き止めようとする中、天人とともに月へと昇っていく。

古文の特色

●歴史的仮名遣い

①語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」→「**わ・い・う・え・お**」
※語頭のハ行や、助詞「は」「へ」などはそのまま。

②「ゐ・ゑ・を」→「**い・え・お**」 ※助詞「を」などはそのまま。

③「ぢ・づ」→「**じ・ず**」

④「くわ・ぐわ」→「**か・が**」

⑤助動詞や助詞の「む・なむ」→「**ん・なん**」

⑥母音（a・i・u・e・o）が連続するとき

・au（ア段＋う・ふ）→ **ô**

・iu（イ段＋う・ふ）→ **yû**

・eu（エ段＋う・ふ）→ **yô**

●古文の文末表現

古文には、現代では見られない文末の表現がある。

「〜けり（〜た、〜たそうだ）」・「〜たり（〜た、〜ている）」

「〜なり（〜だ、〜である）」・「〜ぬ（〜た、〜てしまった）」

●古文の語句

古文には、「いと（とても）」のように、現代では使われなくなった語句や、「うつくし（かわいらしい）」のように、現代と意味が異なる語句が見られる。

確認テスト

(1) 『竹取物語』が成立した時代を選びなさい。

ア 平安時代　イ 鎌倉時代　ウ 室町時代

〔　　〕

(2) 『竹取物語』の展開に沿って、次の**ア**〜**エ**を並べかえなさい。

ア かぐや姫と帝は、歌や手紙を交わした。
イ かぐや姫は天人とともに月へと昇っていった。
ウ 求婚する五人の貴公子に、かぐや姫は難題を出した。
エ 竹取の翁は竹の中からかぐや姫を見つけた。

〔　　→　　→　　→　　〕

(3) 次の文の（　　）に当てはまる仮名を答えなさい。

歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直すとき、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、
「(①)・い・(②)・え・お」になる。

①〔　　〕　②〔　　〕

(4) 次の古文の表現の意味として最も適当なものを選びなさい。

使ひけり。

ア 使われる。（お使いになる。）
イ 使った。（使ったそうだ。）
ウ 使うだろう。（使うつもりだ。）
エ 使うのだ。（使うのである。）

〔　　〕